

研究ノート

Lyons (1977) による主観的／
客観的認識様相の分析とその問題点

片岡 宏 仁

要 旨

Lyons (1977) は認識様相に「主観的」なもの、「客観的」なものを区別した古典的文献だが、ベースとなっている発話意味の3層構造がよく理解されてきたとは言い難い。本稿では、ライオンズの分析の鍵となる特徴を整理し、その問題点を指摘する。

キーワード：様相 (モダリティ)、認識様相、主観性／客観性、言語行為

1 導 入

言語学における様相 (モダリティ) の分析には、いくつかの研究伝統がある。そのなかでも、形式意味論以外での研究伝統において、とくに参照される古典的研究の1つがジョン・ライオンズ (Lyons 1977, 1982, 1995) によって提示された主観性／客観性の分析である。しかし、発話意味に3層構造を想

定してその水準によって主観性／客観性のちがいが生じるという分析の要点は、必ずしもよく理解されてきたとは言えず、この要点に関する問題点の指摘も十分になされてきたとは言い難い。本研究ノートでは、ライオンズの認識様相分析の要点を整理し、それらに関わる主な問題点を指摘する。

2 Lyons (1977) の認識様相分析

Lyons (1977) で提示された認識様相の分析には、次の3つの特徴がある。第一に、発話意味に一定の階層構造を想定すること。第二に、主観的様相と客観的様相を区別すること。第三に、主観的な様相に関連して、発語内行為のちがいをもたらすという点での遂行的な意味が主観的様相にはあると認めること。以下、Lyons (1977) の議論を参照しつつ、詳しく見ていこう。

2. 1 階層構造

ライオンズの分析においては、ある発話の意味に

は3層の階層構造があることが議論の前提となっている (Lyons 1977 : 750)。たとえば、'It is raining' という発話を例にとると、第一にこれには降雨という出来事そのものの表示があり、第二にこれを話し手が事実と認めているという表示があり、第三にそのことを語る・断定するという表示があるとライオンズは考える。Lyons (1977) での用語法では、出来事の表示をthe phrastic (事態内容)、事実と認めるという表示 ('it-is-so') をthe neustic (承認表示)、そのように語るという表示 ('I-say-so') をthe tropic

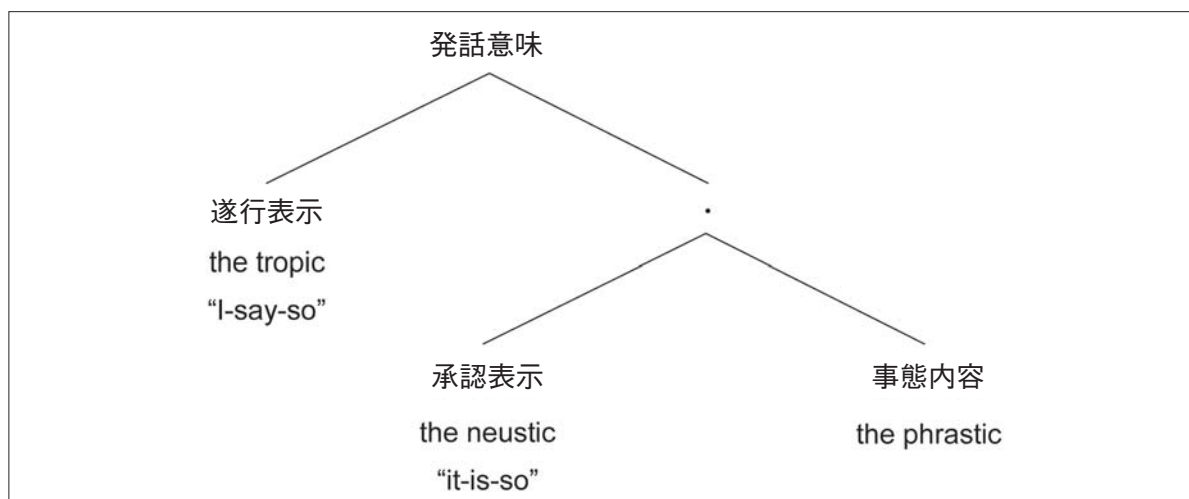


Fig. 1

(遂行表示)と呼ぶ¹⁾。用語に定訳はなく、ここでは仮に以上のように訳しておく。この3つの構成要素は階層をなしており、まず「承認表示」と「事態内容」から構成される単位(名称不明)があり、さらにこれが遂行表示と組みあわせて発話意味全体が構成される(Fig. 1 参照)。遂行表示の水準が担う役割は、今日の言語行為論でいう発語内効力と同じようなものだと考えてよい。

2. 2 定言的断定と様相的な発話

この階層構造をふまえて、ライオンズは非様相的な発話と様相的な発話を区別する。次の例を考えよう：

(1) He went to Paris.
「彼はパリへ行った」 (Lyons 1977 : 795)

(2) a. He may have gone to Paris.
「彼はパリへ行ったかもしれない」

b. Perhaps he went to Paris.
「たぶん彼はパリへ行ったのだろう」

(Lyons 1977 : 796)

発話(1)は、彼がパリへ行ったという事実をそのまま断定している(「定言的断定」)。このとき、話し手は、遂行表示にも承認表示にもなんら限定をつけずに「その断定内容が真であることにコミットメントをとることになる」(ibid.)。他方、発話(2a-b)は、それぞれに法助動詞・法副詞によってそうした断定を弱め、「文が表す命題が真であることへのコミットメントを話し手が明示的に限定する発話」(ibid.)となっている。

2. 3 主観的／客観的な認識様相

次いで、ライオンズは認識様相的な発話に主観的なものと客観的なものを区別する。次の発話(3)は、通常は話し手の不確かさを表す主観的な意味で用いられるが、場合によって客観的な意味でも用いることができる、とライオンズは指摘する：

(3) Alfred may be unmarried.
「アルフレッドは未婚かもしれない」

(Lyons 1977 : 797)

アルフレッドが未婚かもしれないという可能性を主

1) このうち、tropicとneusticは哲学者ヘア(Richard M. Hare)の『道徳の言語』を踏襲している：《ヘアによる承認表示と遂行表示の区別は、フレーゲ(cf. Dummett, 1973 : 308ff)を踏襲してラッセル&ホワイトヘッド(1910 : 9)が断定記号(⊢)に帰した機能のうち2つを分けるものとなっている。断定記号は命題変項の前におかれ、その命題が真として断定されているのであってたんに考慮のために思い描かれているだけではないことを示す》(Lyons 1977 : 750)。

観的に述べている場合には、話し手は「アルフレッドが未婚であるという可能性へのコミットメントを自らの不確かさの観点で主観的に限定している」(Lyons 1977: 797)。この場合には、次のような発話を続けることができる：

(4) but I doubt it

「だが、ぼくはそれを疑っている」

(5) and I'm inclined to think that he is

「そして、ぼくは彼が見込んだと考える方に傾いている」

(Ibid.)

このように発話を続けられることがなぜ(3)が主観的な意味で発話されていることの論拠になるのか、実のところライオンズは論じていない。そこで、次のように補っておこう。まず、発話(4)で代名詞itが指示しているのは(3)で提示された命題でなくてはならない。もし、その命題が「アルフレッドが未婚であること」全体であるとする、みずから述べた内容を疑っていると態度表明することになる。そうであるなら、これは典型的なムーア文そのものであって、「いま雨が降っている。でもぼくはそれを疑っている」のように背理を来す発話になってしかるべきだろう²⁾。だが、(3)-(4)を続けて発話してもそのような背理は生じない。したがって、(4)でitが指示している命題は、それとちがうものでなくてはいけない。ここでitが参照している内容として有望な候補は、mayによる限定をのぞいた部分、つまりAlfred is unmarried (アルフレッドは未婚だ) で表されるような命題だと考えられる。発話(5)では、その点をもっとはっきりしている。「…と考える方に傾いている」に続くthat he isは明らかにunmarriedが省略された形であって、Alfred is unmarriedで表される

ような命題を認める方に話し手は傾いているのだと述べられている。実際、主観的解釈をパラフレーズするならば次のように言い換えられるとライオンズは述べている：

(6) Perhaps Alfred is unmarried.

「たぶんアルフレッドは未婚だろう」

(Lyons 1977: 798)

いずれの場合にも、Alfred is unmarriedの命題に対するコミットメントの緩和がなされているので、続けて疑いや傾斜が表明されても背理が生じないのだと考えられる。ゆえに、(4)や(5)を続けて発話できるならば(3)が主観的に解釈されていることを支持する論拠になりうる。

他方で、同じ例(3)が客観的様相に解釈されることも可能だとライオンズは言う：たとえば90人からなる集団がいて、そのうち1人がアルフレッドだとする。さらに、90人中30人は未婚だとわかっている。ただし、誰が見込んで誰が既婚なのかまではわかっていないものとする。このとき、「話し手が客観的事実として主張するのを望むならば、アルフレッドが未婚である可能性は主張可能であると言える。アルフレッドが未婚である可能性(計量可能な可能性)を話し手はたんに「思っている」のでも「信じている」のでもなく「知っている」のだと言うことも妥当だろう」。

以上の議論を見る限りでは、話し手個人の主観的な推量を表す解釈と、統計のような客観的論拠からでてくる確率を表す解釈をそれぞれ「主観的」「客観的」と呼んでいるようにも受け取れる。だが、Lyons (1977) に特有な点は、これを前述の3層構造において様相が限定する水準のちがいとして見るところにある。

2) ムーア文という現象について、語用論的な観点による基本的な分析を提示している文献は、右を参照：Searle (1969: 1998); Levinson (1983: 235)。ライオンズ自身による議論はLyons (1995: 254)。ライオンズの議論を踏襲して議論を展開した文献に中右 (1994) がある。

2. 4 主観的／客観的認識様相は限定を受ける水準が異なる

この主観的／客観的な認識様相の区別を、ライオンズは次のようにまとめる。まず、いかなる限定も受けていない定言的断定は次のように表示される：

(7) *. . p*

このピリオド *.* は限定がないことを示す。1つ目のピリオドは “I-say-so” の遂行表示になんら限定がないことを表し、2つ目のピリオドは “it-is-so” の承認表示に限定がないことを示す。最後の *p* は命題 = 事態内容に対応する。この3つの構成要素は、いずれも否定を受けることができる。もし遂行表示が否定を受ければ、「*p* が事実であるとは私は言わない」(I-don't-say that it is the case that *p*) となり、ライオンズの記法では否定記号 *~* で次のように記される：

(8) *~ . p*

次に、承認表示が否定を受けた場合には、「*p* が事実ではないと私は言う」(I say that it is not the case that *p*) という否認 (denial) の事例ができる：

(9) *. ~ p*

この表記法で、前述の主観的／客観的な認識様相は、それぞれ次のように表記される (Lyons 1977: 803-4)：

(10) 主観的な認識様相：*poss . p*

(11) 客観的な認識様相：*. poss p*

この *poss* は *possibility* の略で、法助動詞 *may* が寄与する意味を表す。この表記から明らかに見て取れるように、ライオンズがいう「主観的な認識様相」とは、話し手が定言的に “I-say-so” と断定しない事

例のことを指す：断定という発語内行為が *may* のような法助動詞によって限定されるのが主観的認識様相であり、そうではなく事実かどうかの承認表示 (“it-is-so”) が限定されるのが客観的認識様相である：「客観的様相をもつ発話は（それが真理様相であれ認識様相であれ）限定抜きの I-say-so 要素もっているのだと記述できる。このとき、限定を受けているのは it-is-so 要素であり、計量化できるとすれば 1 から 0 にわたるような蓋然性の度合いが弱められているのだ」(Lyons 1977: 800)。

2. 5 要約

ここまで見てきたライオンズの分析の特徴を3点にまとめておこう。第一に、発話意味に遂行表示・承認表示・事態表示の3層からなる階層構造を想定する。この3層構造のどの水準も限定を受けないのが、事実を直截簡明に述べる非様相的な定言的断定であり、これと対比される様相的な意味は、3層構造のどの部分が限定されるかによって異なる。第二に、主観的様相と客観的様相が区別される。第三に、主観的な様相に関連して、発語内行為のちがいをもたらすという点での遂行的な意味が主観的様相にはあると認める。主観的認識様相の解釈で法助動詞が限定する水準が遂行表示——言語行為の水準——であるとライオンズは考える。3層構造を想定し、法助動詞（やその他の様相表現）が意味を寄与する水準が異なるという説明は、エレガントではある。だが、実のところライオンズはこのような大枠の分析を示したのみで、個別の様相表現（法助動詞、法副詞、法形容詞 etc.）を入念に記述してはいない。そして、具体的な事例を検討すると、こうした図式がうまくいかないことがわかる。

3 問題点1：話し手が関与しないが客観的でもない事例

認識的な法助動詞は主観的に話し手が関与する意味をもつか、さもなくば客観的な意味をもつという

のが、ライオンズの基本的な2分法である。しかし、この2分法におさまらない事例は、すぐに見つかる。

おそらくもっとも自明なのは、思考動詞や発言動詞の補文だろう：

- (12) You said that you thought that it might be better to wait until January (...) (*New York Times, Jun 26, 1957*)

「1月まで待った方がいいかもしれないと考えてるってキミは言ったじゃないか」(過去時制の発言・思考動詞補文：過去における主節主語の認識)

こうした事例では、mightが表す認識的な可能性は主節主語の知識・信念から捉えたものとなっている。「90人中30人は未婚」といった確率のような客観的認識様相と異なる一方で、話し手による断定の緩和をしているわけでもないのは明らかだろう。

次に、主節に生じた場合にも、話し手の観点をとらない事例が知られている：

- (13) 文脈：アンはビルのためにサプライズ・パーティーを準備している。ところが、不運にもクリスがこの企てを知ってビルになにもかもバラしてしまう。いま、ビルとクリスはアンが隠れてこっそりとパーティーの支度にいそしんでいるところをみて楽しんでいる。2人の見ているなか、アンはクリスのアパートに向かって、パーティーハットをたくさん抱えて歩いている。アンは、いつもビルが帰宅するときに乗っているバスを見かけて、大慌てで茂みに隠れる。クリスの家の窓から様子を見ていたビルは大笑いするのだが、一方のクリスは不思議がってビルに尋ねる。なんでアンは茂みに隠れたりなんかしてるの？ するとビルがこう答える：

I might be on that bus.

「俺がああバスに乗ってるかもしれないだよ」

(Egan, Hawthorne and Weatherson 2005 : 140)

この例では、ビル当人はもちろん自分がバスに乗っ

てなどいないことを承知している。したがって、バスに自分が乗っている事実を否定する立場にこそあれ、そのことを控えめに断定する理由はない。この例では、mightが表す認識的可能性はアンの観点からとらえたものとなっている。

また、次のような事例もある：

- (14) At that point, he could/might still have won the game. (= 'At that point, it was still possible that he would win the game.')

「あの時点では、彼はまだゲームに勝つことができた／勝ったかもしれない」(仮定法過去完了(反事実)：過去における認識)

(Stowell 2004 : 631)

この事例は、話し手による認識的な推量を表してこそいるが、発話時点で「ゲームに勝つ可能性がある」と考えているわけではない。

以上見てきた事例は、いずれも、ライオンズの定義における「客観的認識様相」にも「主観的認識様相」にも該当しない。ここから、3層構造における水準の違いという観点では、うまく記述できない事例があることがわかる。(15)のように主節に生じたものであれ、(16)のように従属節に生じたものであれ、認識様相を表す法助動詞の意味には、共通している部分があるはずである。すなわち、ある認識主体の持ち合わせている知識・信念をもとに査定した特定の命題の認識的な蓋然性を表している点は、主節でも従属節でも、あるいは上記のようなトリッキーな事例でも変わらない。

- (15) John might be at home.

「ジョンは自宅にいるかもしれない」

- (16) Mary thinks that John might be at home.

「ジョンは自宅にいるかもしれないとメアリーは思っている」

そうした認識主体の変数を入れる余地が、ライオンズのアプローチには欠けている。

4 問題点 2 : 遂行節の無限後退

次に、認識様相の法助動詞が発語内行為に関わる意味を貢献している、という分析にも問題点がある。ライオンズ自身は詳しく記述していないため、たとえば遂行表示の水準を限定する場合と承認表示の水準を限定する場合で、may (をはじめとする認識様相の法助動詞) が同じ意味を貢献しているのかどうか定かではないし、また、主観的な解釈の事例において、正確に言ってどういう言語行為が遂行されているのかも明記されていない (この指摘はPortner (2009 : 123) による)。

ライオンズの延長線上で、Coates (1983 : 179) は予測用法のwillがI predict Sという行為遂行的な意味をもってると分析している。だが、これには大きな問題が見いだせる。

Coates (1983) は、willの用例に見られる認識的な「予測」の意味はI predict S (私はSと予測する) にパラフレーズできるという。これは、willが予言・予測という発語内効力をもたらしているということであり、ライオンズがいう遂行表示の水準に法助動詞が意味を寄与するというアプローチの延長線上にある (その一方で、Coatesは純粋な未来時の意味はなぜか認めていない)。すると、たとえば次の例(17)は(18)のようにパラフレーズできるだろう :

(17) It will rain tomorrow.

(18) I predict that it will rain tomorrow.

だが、ここで疑問が生じる : では、predictの補文

に生起しているwillはどのような意味なのだろうか? もし、これも予測であるとするならば、さらにI predict Sでパラフレーズできるだろう :

(17) I predict that I predict that it will rain tomorrow.

だが、これは明らかに通常の解釈と異なる。「明日は雨が降る」というとき、自分が予測することを予測しているわけではないからだ。では、I predict Sでパラフレーズされるのでないとするれば、このwillはどのような意味だろうか。おそらく、純粋な未来時の標識と見るのが妥当だろう。しかし、そうであるなら、もともとの(17)の主節willも純粋な未来時の標識と分析してよいはずである。しかし、Coates (1983) はwillにそうした純粋な未来時の意味を認めていない。この例において、willが純粋に未来時の意味を貢献しているとしよう。すると、この文を発話することにおいて、話し手は「明日雨が降る」という未来に関する命題を断定することになる。そして、それこそ予言・予測という発語内行為の定義そのものであって、willそのものが発語内効力の意味を貢献するには及ばないのである。これは、The cat is on the matを発話すれば猫がマットの上にいるという現在の事実に関する命題が断定され、BE動詞に「現在の事実を話し手が断定する」という発語内効力の意味をもとめるに及ばないのと同様である。

5 結 び

以上、ライオンズの古典的アプローチに見られる問題点を2つ検討してきた。ライオンズの分析は大枠においてエレガントだが、正当に記述できない事

例が見つかる。第一に、従属節や一部のトリッキーな文脈で、ライオンズがいう「主観的認識様相」でも「客観的認識様相」でもないと思われる解釈が見

つかる。第二に、主観的な解釈を受けた法助動詞が言語行為の水準で機能しているという分析は、必ずしもうまくいかない。

参考文献

- Coates, J., (1983), *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London/New York: Croom Helm.
- Egan, Andy, John Hawthorne and Brian Weatherston, (2005), "Epistemic modals in context." In G. Preyer and G. Peter (eds.), *Contextualism in Philosophy*, 131 – 168. Oxford: Oxford University Press.
- Palmer, F. R., (1990), *Modality and the English Modals*. 2nd edition, London: Longman.
- Palmer, F. R., (2003), "Modality in English: Theoretical, descriptive and typological issues," in Facchinetti, Krug and Palmer (eds.) *Modality in Contemporary English*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hare, R. M., (1952), *The Language of Morals*. Oxford: Oxford University Press.
- Levinson, S. (1983), *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, J., (1977), *Semantics*, vol.2. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, J., (1982), "Deixis and subjectivity: Loquor, ergo sum?" In R. J. Jarvella, & W. Klein (Eds.), *Speech, Place, and Action*. John Wiley & Sons.
- Lyons, J. (1995), *Linguistic Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 中右実. (1994), 『認知意味論の原理』. 東京: 大修館書店.
- Nuyts, J., (2001), *Epistemic Modality, Language, and Conceptualization*. Amsterdam: John Benjamins.
- Portner, P. (2009), *Modality*. Oxford: Oxford University Press.
- Searle, J., (1969), *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J., (1998), *Mind, Language, and Society: Philosophy in the Real World*. New York: Basic Books.
- Stowell, T. (2004), "Tense and modals." In J. Guéron & J. Lecarne (eds.) *The Syntax of Time*. MIT Press.